

『復元』<sup>やまとぶんか</sup> 感覚』と『日本文化』

第2次世界大戦が終結した1945年8月15日、中山正善2代真柱は「復元」を発表した。つまり、天理教の教義を教祖によって教えられた信仰への「復元」であった。それまで、長く続いた「革新」の時代ゆえに、教団は当局からおつとめの形態や神名の変更を求められ、信者たちは三原典に親しむことはできなかった。教えの学問的掘り下げを必要としていたが、中西牛郎(1859～1930)や宇田川文海(1848～1930)といった天理教外の知識人に依頼して、教えが探究されていたのである。

「復元」を契機として、2代真柱を中心として、三原典に基づき、信仰に基づいた教えの掘り下げが進められた。戦前において、「天理教学」の語は教内でも確かに用いられていた。

しかしながら、「復元」を契機とした戦後の天理教学は、三原典に基づく点で、戦前の天理教学と決定的に異なっている。しかしながら、そこには天理教学の断絶はない。中島秀夫が『復元』感覚』という語で説明するように、「復元」へ向かう天理教学の雌伏が、戦前期にも確かに存在していたのである。<sup>(1)</sup>

この一端を、『日本文化』から紐解いてみたい。天理図書館を中心として結成された日本文化研究会は、1934(昭和9)年より『日本文化』を出版していた。この雑誌は、天理図書館の館報と天理教亜細亜文化研究所(現おやさと研究所)の所報を兼ねていたと考えられる。『日本文化』には、2代真柱の『神』『月日』及び『をや』について(第2号、1934年)や『「おふでさき」用字考』(第5・6号、1936年)など、「おふでさき」に関する論文が発表されている。すなわち、「復元」へ向かって、原典研究が着実に進められていたのである。

この『日本文化』には、戦前・戦後にわたって、天理教に関する論文ばかりではなく、海外伝道を見据えた宗教研究に関する論文もまた発表されていた。そのなかには、イスラームに関する論文が少なからず掲載されている。その主な執筆者が諸井慶徳であった。

諸井慶徳とイスラーム研究

諸井慶徳(1914年3月30日～1961年6月25日)は、「復元」の歩みを支え、また今日の天理教学研究の基盤を形成した点で、最も重要な天理教学者の一人である。諸井は、1942(昭和17)年3月31日に東京帝国大学大学院の課程を修めている。その2日後の1942年4月2日、彼は27歳で天理教山名大教会長に就任した。

1948(昭和23)年には、日本文化研究所から改称した天理文化研究所の所長に任命されている。その後、1949(昭和24)年には、天理文化研究所長と天理大学宗教学科長の重責を、若干35歳の若さで担うことになった。まさに、天理教学研究の行方は諸井慶徳の双肩に託された。

諸井の研究は、哲学者のマックス・シェーラー(1874～1928)に基づく宗教哲学研究から始まった。彼は東京大学に卒業論文「マックス・シェーレルの宗教哲学」を提出した後、イスラーム神秘主義(スーフィズム)に研究を拡げている。それでもなお、シェーラーの宗教哲学に基づく問題関心を生涯にわたって抱き続けた。

諸井がイスラームに関心を抱いたきっかけは、定かではない

が、2代真柱や天理教の海外伝道が深く関わっていたのではないかと推察される。戦前の宗教研究や神秘主義研究において、イスラーム神秘主義はほとんど知られておらず、また史料的制約も多いなかで、諸井がこのテーマを選んだのは慧眼に値する。「回教神秘主義—特にその信仰の実相に就て」(『宗教研究』109号、1941年)において、諸井は欧米の研究成果を整理しながら、初期のイスラーム神秘主義を考察している。この論文のなかで、その後に出版された大著『宗教神秘主義発生の研究』(1966年)の問題関心をすでに読み取ることができる。

海外伝道のためのイスラーム研究

戦前・戦後にかけて、天理教の海外布教の後方支援を担う研究所の研究者として、諸井はイスラームを研究していた。「国家と宗教の諸問題—伝道政策論を中心として—」(『日本文化』第15号、1944年)のなかで、宗教の伝道には、国境をまたぐだけに止まらない諸課題があることを、キリスト教やイスラームの伝道政策や、キリシタン伝道を事例としながら指摘している。イスラームの特徴としては、カリフ制が挙げられ、宗教的権威と政治的権威の一体性を理想とする政教一致であることが述べられる。彼が掲げた諸課題については、今日でもなお海外伝道の課題として残されている。諸課題を披歴しながら、国家と伝道に関して、諸井は以下のように述べている。

即ち伝道師は相手国の風俗慣習に対しては十分の同情と共感を以て対すべきである。徒に母国に於ける様式をそのまま当てはめんとし、之を排するのは相手国家との間に深い溝を掘ることになる。然も無暗にその風俗に溺れることも亦避けねばならない。長い眼を以て自分の本質を失ふ事なく進むべきである。<sup>(2)</sup>

海外伝道への歩みの一環として、諸井のイスラーム研究は戦後においても変わることなく進められた。「伝道の論理」(『日本文化』25号、1948年)、「回教要説」(『宗教文化研究所報』12号、1951年)、そして「海外伝道論—配慮すべき諸点—」(『宗教文化研究所報』16号、1952年)など、天理教のイスラーム伝道を視野に入れた議論が常に展開されている。

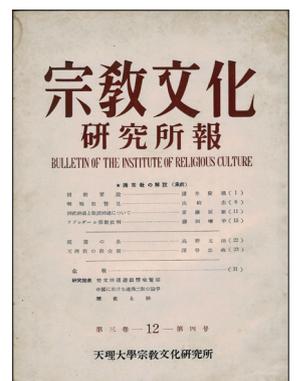


写真 『宗教文化研究所報』(12号)

宗教研究と天理教の海外伝道論は、諸井慶徳の思想のなかで有機的に結びついてきた。天理教学とともに、彼はイスラーム神秘主義を中心とした宗教研究を進めていくことになる。彼が探求したイスラーム神秘主義は、クルアーンにおける神の啓示と、預言者ムハンマドの神秘体験に根差した神との一体性であった。次号では、諸井のイスラーム神秘主義研究について考察することにしたい。

〔註〕

- (1) 中島秀夫『総説 天理教学』、天理教道友社、1992年。
- (2) 諸井慶徳「国家と宗教の諸問題—伝道政策論を中心として—」(『日本文化』第15号、1944年)、26頁。